

網走湖における氷下ひき網漁法

鳥 澤 雅

キーワード：ワカサギ、網走湖、氷下ひき網、漁法

網走湖で行われる氷下ひき網漁業

網走湖は、網走市と女満別町にまたがって位置し、ヤマトシジミやシラウオとともに、ワカサギ漁業の盛んな汽水湖です。流水が接岸する冬期間、網走湖の湖面は全面結氷します。しかし網走湖では、この冬こそがワカサギ漁業の最盛期なのです。

この時期網走湖では、北海道でも珍しい氷下ひき網漁法で、ワカサギを漁獲しています(写真1)。

氷下ひき網漁業の歴史

網走湖の氷下ひき網漁業は、網走湖畔に移り住んだ漁業者が、故郷の秋田県八郎潟で行われていた漁法を伝えたとされています。なお、氷下ひき網漁法発祥の地は長野県諏訪湖であり、八郎潟へ

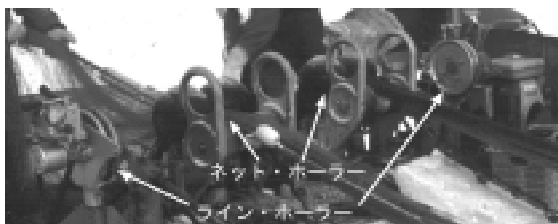


写真1 氷下ひき網漁業の操業風景
下：ライン・ホーラーとネット・ホーラー

は江戸時代寛政年間に、諏訪湖から漁法が伝えられたとされています。

網走湖の氷下ひき網漁法は、北海道水産試験場の古い資料(1930年)に、当時の操業方法が図入りで紹介されています。

しかし、基本的な仕組みは昔から変わらないものの、現在は昔に比べ、操業方法や仕掛けの形状などがだいぶ様変わりしているようです。そこで、この珍しい氷下ひき網漁業の、網走湖における現在の操業方法を紹介します。

漁法の概要

氷下ひき網漁法は、あらかじめ湖面の氷に穴を開け、そこからロープを氷の下に張り巡らしておき、そのロープを使って、氷の下で巧みに網を引いて魚を漁獲するひき網漁法です。

網走湖では毎年、湖面が十分に結氷した12月頃、ワカサギ漁業者が総出で、結氷した湖上で氷の穴開けとロープの敷設作業を行います。結氷した湖に設置された仕掛けは、上空から見ると扇形をしており、1つの漁場は3組の仕掛けからなっています(図1)。

氷の穴開けとロープ敷設の具体的な作業方法はあとで説明することにして、まず具体的な操業方法を説明します。

操業方法

操業は3～5名程度が一組になって行います。

図1に示した小さな四角および丸は氷に開けられ

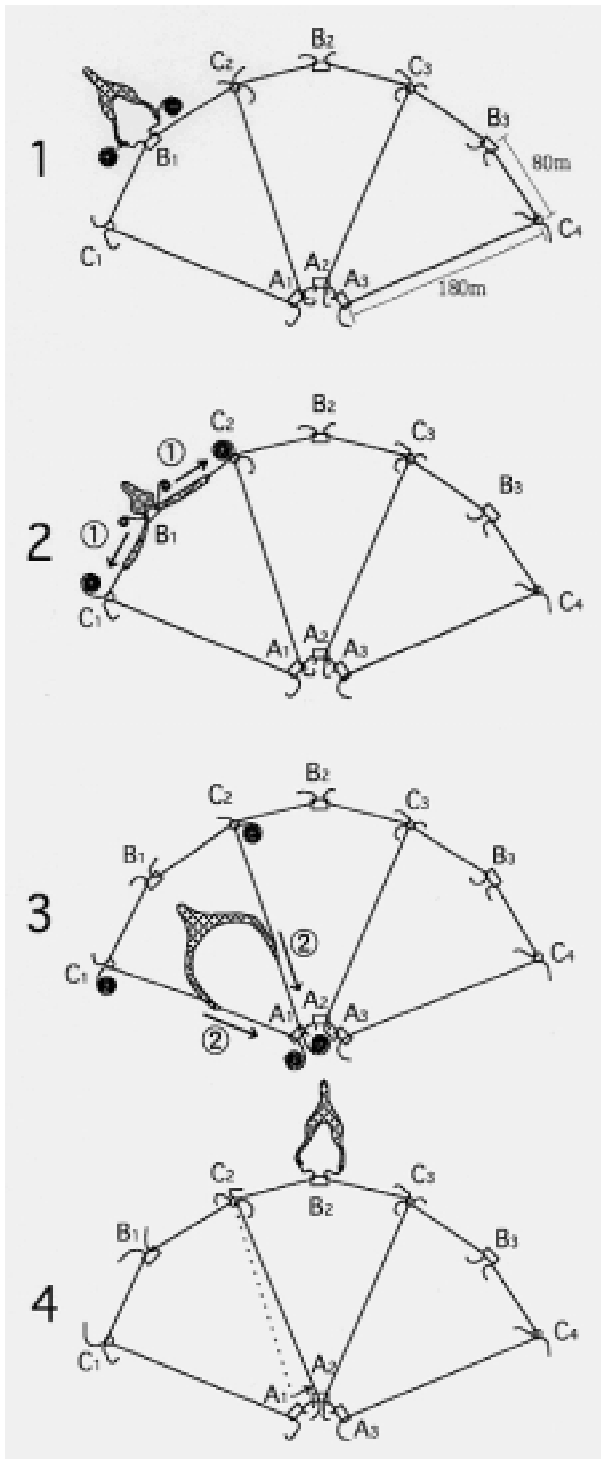


図1 網走湖における氷下ひき網漁業の操作方法
 丸数字の順にロープを引いて網を操作する
 穴を変えながら同一漁場で3回操作する
 実線は各穴の間に張り巡らされたロープ
 A1-3: 網を引き上げる穴 (1.7m×0.7m)
 B1-3: 網を氷の下に入れる穴 (1.3m×0.6m)
 C1-4: 網を左右に開く穴 (0.6m×0.6m)

た穴を示し、各穴間を結ぶ実線は、氷の下に事前に張り巡らされたロープを示しています。

まず網を、はじめに網を入れるB₁の穴(図1-1)へ、そりに乗せてスノー・モービルで運びます。

次に、あらかじめB₁-C₁間の氷の下に敷設しておいたロープのB₁側の端を網の左端に、同じくB₁-C₂間に張られたロープのB₁側の端を網の右端に取り付けます(図1-1)。ロープをC₁、C₂の穴からそれぞれ引くと網が大きく左右に広がります(図1-2の矢印)。このとき、網とともに別のロープをしばりつけて延ばしながら送り出します。

網が開いて端がそれぞれC₁、C₂に達したら、今度は、これもあらかじめC₁-A₁間、及びC₂-A₁間に事前に敷設しておいた2本のロープにつなぎ代えて、網をA₁の穴に向かって引き寄せます(図1-3の矢印)。このときも別のロープを取り付けて網と一緒に送り出します。網がすばまってA₁の穴に達したら、網に入った魚ごと網をA₁の穴から引き揚げ、1回目の操作が完了します。

1回目の操作が終わったら、次はB₂の穴に網を運び(図1-4)、今度はC₂、C₃からロープを引いて網を広げて、A₂から網を引いて漁獲します。最後にB₃の穴から同様に操作します。

一連のいずれのロープを引く作業でも、ロープを引くときにはその後端に別のロープを結びつけて繰り出すので、ロープを引き終わったあとには新たなロープが敷設され、常に穴と穴の間にロープが張られた状態が保たれます。

かつては網を馬や人力で引いていたようですが、現在の網走湖では、ほとんどの作業が機械化されています。ロープは2枚の円盤を合わせたようなライン・ホーラー左右2基1組で巻き取られますし、網も、黒いバスケット・ボール2つを押し合わせたようなネット・ホーラー左右2基1組

で引き揚げられます（写真1）。これらは油圧を介したガソリン発動機で駆動します。さらに、網を含むこれら漁業機材や漁獲物の運搬、漁場間の移動には、スノー・モビルが使われています。

氷の穴開けとロープの敷設に用いられる道具

では、結氷した湖面の下に、これらのロープをどのように敷設するのでしょうか。次にその方法を見ていきます。



写真2 氷の穴開け作業
上：チェーン・ソーでの穴開け
下：氷ばさみを使った氷の除去



写真3 ロープ敷設に使用される道具
左から、4本のロープを平行に引くための
こん棒、鉄製の鉤、先が二股になった棒

氷の穴開け作業とロープの敷設作業には、いくつかの道具が用いられます。氷の穴開け作業には、氷を切り裂くチェーン・ソーと、切り取った氷を持ち上げる氷ばさみを使います（写真2）。また、開けた穴にロープを通す作業では、ロープを通す針の役目をする長い木製の板、この板を氷の下でまっすぐに前進させるための鉄製の鉤と先が二股になった棒を使います。さらに、4本のロープを絡まず平行に一度で通すためのこん棒も必要となります（写真3）。

ロープの敷設方法

はじめに、湖氷上を測量して、穴を開ける位置を決めます（図2-1）。次に、氷の穴開け作業とロープの敷設作業を行います。

まず、網を引き揚げる3つの穴のうち、真ん中の穴（図2-1のA₂）と、網を入れる同じく3つの穴のうち、真ん中の穴（図2-1のB₂）までの間に、ロープを通す作業をします。

はじめにチェーン・ソーで穴A₂を開け（写真2）後端にロープを取り付けた木製の長い板を、この穴から穴B₂に向かってまっすぐに押し込みます（図2-2、写真4）。板の長さは目的地に一度で達するほどは長くないので、板の長さより若干短い距離のところ、氷に誘導のための小さな穴を開けます。この穴から鉄鉤を差し込んで、氷の裏にある板の先端を探り当て、開けた小さな穴の真下の正しい位置に誘導します（図2-2、写真5）。この板を先が二股になった棒で押し込みながら、さらに少しずつ前へ送ります（図2-2、写真6）。

次に板の先端が達するあたりに、また小さな穴を開け、先端の探索、位置修正、板の押し進め・・・を、板の先端が目的地である穴B₂に達するまで繰り返します。

穴B₂に板の先端が達したら、穴から板をまっすぐ引き抜きます（図2-3、写真7）。これで

穴A₂と穴B₂の間にロープが通りました。このロープの後端に、お互いが絡まないよう4本のロープの先端を等間隔に結んだこん棒をつなぎ、はじめのロープを引き抜くと、今度は4本のロープが氷の下に平行に通ります(図2-3、4、写真8)。

その後、4本のロープの先端それぞれを、はじめにロープを通した要領で、長い板を針代わりにして、B₂からC₁、C₂、C₃、C₄に分配します(図2-4)。このとき、B₂-C₂、C₂-B₁、B₁-C₁、B₂-C₃、C₃-B₃、B₃-C₄

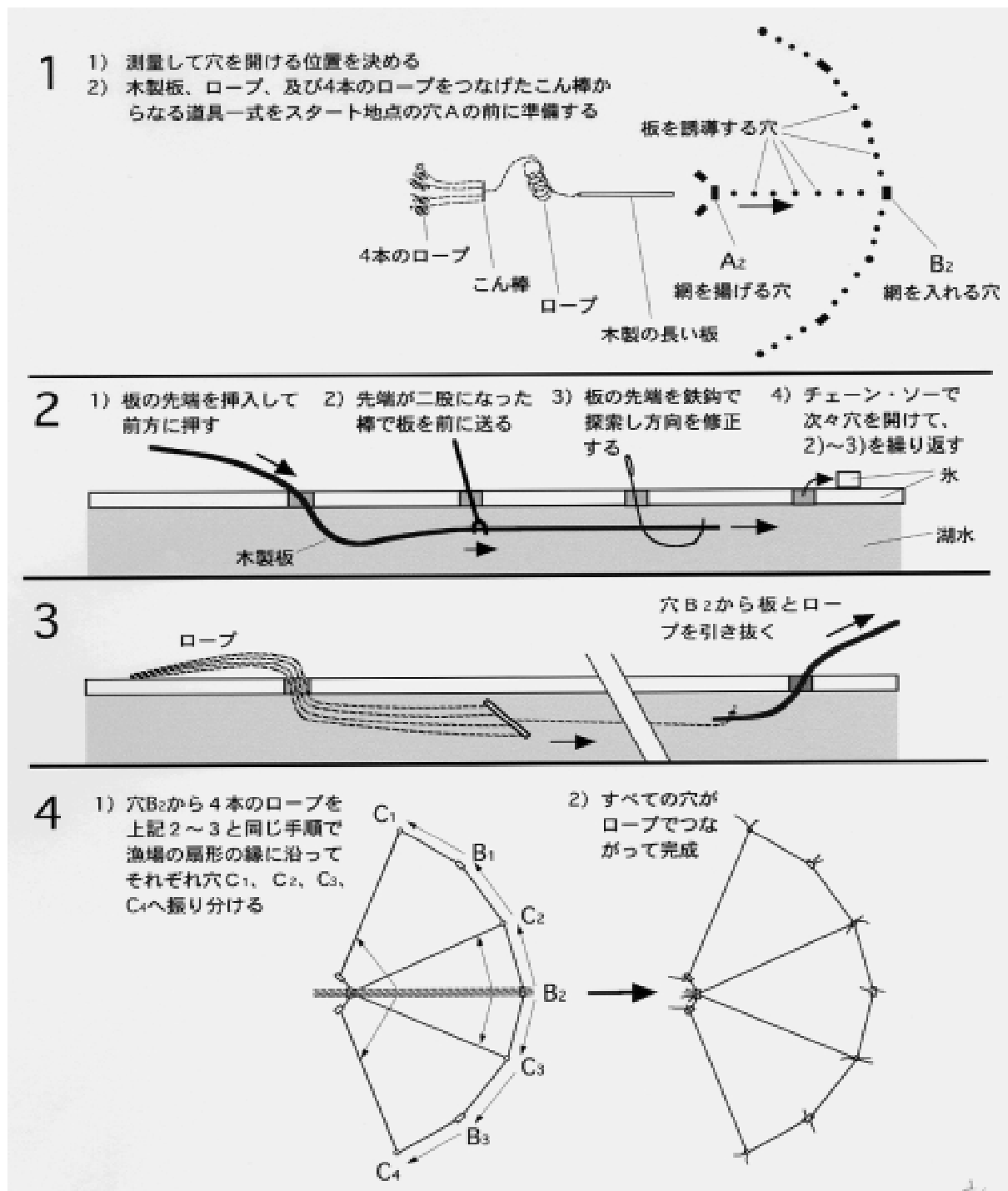


図2 網走湖の氷下引き網漁業におけるロープの敷設方法



写真4 氷に開けた穴から長い木製の板を挿入する



写真7 長い木製の板を穴から引き抜く



写真5 鉄製の鉤で板の先端部を探索・誘導する



写真8 4本のロープを結んだこん棒を引き抜く



写真6 先が二股の棒で板を前方へ押し進める
穴の中に板が白っぽく見える

それぞれの間にも、ロープを張り巡らせます。

以上で、必要なすべての穴間にロープが張り巡らされたこととなります(図2-4)。最後に各穴のロープの先端を、穴のそばに立てた柳の木などに掛けて、すべての準備が完了です。

おわりに

知ってしまえば「なるほど」という、氷下ひき網漁法の仕組みですが、この方法を考え、そして改良を加えてきた先人の知恵には感服させられます。

ところで、氷下ひき網漁業発祥の地といわれる諏訪湖では、地球温暖化の影響からか、近年は湖面が全面結氷しなくなり、この漁法は現在行われていないとのことです。網走湖では、未永くこの漁法が伝えられ、たくさんのワカサギが銀鱗を躍らせながら氷の下から揚がってくる光景が、いつまでも見られることを願って止みません。

(とりさわ まさる 中央水試企画情報室

報文番号B2216)